百々裏話（63）

おもて　あきら

〔三番叟の問答の古態〕　――その一――

前回、翁（式三番）の中で三番叟と千歳（上掛りでは面箱持）がとりかわす問答が狂言的おかしみを内含するものであることや、その問答に初日・二日目（烏帽子の祝儀）・三日目（子宝）、及び「田歌」の四種の形式が現存していることを述べたが、三番叟の問答の古い形態については、あいにく正月だったので調査の便宜を得られず、何もふれずにおいた。

その後、見当をつけてあった二種の資料にあたってみたところ、意外に三番叟の問答の形態に著しい変動があったことが知られた。あれこれ論ずるよりも、資料そのものを翻印することの方が有益なようである。

その一つは、鴻山文庫蔵の寛永十年（一六三三）二月「道伴」刊行の奥付のある『式三番』の謡本である。「とう〳〵たらり」で初まる翁の文句は、末尾に「シテ口ノ中ニテ長久ゑんまんそくさいえんめい今日の御きたうなり口伝在」と、口中での祈禱の文句を附している以外は現行の四日之式とほとんど同じであるが、以下に左の如く三番叟問答の完全な形三種を載せている点が貴重である。

サンバサ初日

サンバヘおさへ〳〵おふ。よろこびありや。わがこの所よりもほかへはやらじとぞおもふモミノダンマイ　サンバヘ物にこゝろへたるあどの太夫殿にげんざう申さう　センザイヘちやうど参つて候　サンバヘたが御立候ぞ　センザイヘ年比のほうばいづれともだち。御みあとのためにまかりたつて候。今日のさんばさるがくきり〳〵じんじやうにまふておりそへいろのくろいぜうどの　サンバヘ此いろのくろいぜうが。今日の御きたうをせんしうばんぜい所はんじやうとまひおさめうずる事は。なによりもつてやすうさう。まづあどのたゆふどのは。もとのざしきにおも〳〵と御なをり候へ　センザイヘそれがしがもとのざしきへなをらふずる事は。ぜうどのゝまひよりいとやすふさう。御まひなふてはなをり候まじ　サンバヘあらやうがましや　センザイヘさらばすゞをまいらせう　サンバヘそなたこそ

二　日

サンバヘおさへ〳〵おふ。よろこびといふ文をえて。かさねて所知にぞくだりけるモミノダンマイ。物にこゝろへたるあどの太夫殿にそつとげんざう申さう　センザイヘちやうど参つて候。サンバヘあどゝ申所にはや〳〵との御たちまづもつてしうちやく申て候　センザイヘされば候　サンバヘあどのたゆふどのに申たき事の候。　センザイヘ何事にて候ぞ　サンバヘさつきのさ女ばうがかさのはをつらね。さなへおつとつてうちあげてうとふたはおもしろふはなく候か　センザイヘげにおもしろきものにて候　サンバヘさあらばあどの太夫殿をたうたぶしにてよび申さうが御こたへあらふずるか　センザイヘ御よび候へこたへ申さう　サンバ上ヘあどのや。あどの〳〵あどのやあどのや　センザイヘ何時にこたへ申さうぞ　サンバヘ人がやつといはゞやつとこそこたふる物なれ。とつておゐてあさつてわたり御こたへすい　センザイヘぜうどのゝ、御ふくりうもつともにて候。いま一度御よび候へ。ことばの下よりこたへ申さう　サンバヘしかと候か　センザイヘ中〳〵の事　サンバヘあどのや。あどのあどのあどのやあどのや　センザイヘなぞとよ。ヘなぞと〳〵なその給へぜうどの　ヘあどの〳〵あどの〳〵　あどのや〳〵　センザイヘなぞとよ　サンバヘあどのや　センザイヘなぞとよ　サンバヘけふはよきてんき候よ　センザイヘあらめでたや一さし御まひ候へ

三　日

サンザヘおさへ〳〵おふ。こゝをどこぞととふたれば。びだつちやうじやのもとゝかや

モミノダン。物にこゝろへたるあどの太夫殿にそつとげんざう申さう　センザイへちやうど参つて候　サンバへそれがしがよび申所に。はやく〳〵との御立まづもつてしうちやく申候　センザイへされば候　サンバへあどの太夫殿をめきゝいたひて候　センザイへ何と御らんじ候ぞ　サンバへふく人とみ申て候　センザイへごんごだうだん御目がきひて候またいろのくろいぜうどのをめきゝいたひて候　サンバへ何と御らんじて候ぞ　センザイへとく人とみ申て候　サンバへさん候それがしはとく人の中にてもことく人にて候。こを十人もつて候が。上五人は玉をのべたるやうなるむすめにて候。下五人はるりをのべたるやうなるめなこにて候　センザイへまづはそろへて御もち候よ。　サンバへ十人の子をくるまざにおゐてひと口によぶやうになをつけて候　センザイへ何と御つけ候ぞへまづおつとりちがへて　おとよ　けさよ　たつまつ　いるまつ　だんだら　いなごに　かいつく　ひつつく　ひうちぶくろ　ぶらり　とつけて候　センザイへあらめでたや一さし御まひ候へ

四　日

右初日同前也たゞしくでんあり

〔濁点は一部は底本のもの。大半は仮に補った。句点や肩書は底本通り。傍線は底本節付部分。〕

管見では、三番叟問答の完形としては右の版本が最も古い資料である。江戸時代に出版された謡本には、実際の刊年より古い年記を掲げたものが多く、「道伴」刊行のいわゆる寛永中本も、寛文年間刊行の本に寛永十年の奥付を附している形跡がある。従って、右の『式三番』も寛永十年より後年の刊行である可能性が強いが、元禄以降にまでくだることは恐らくあるまい。かつ、こうした版本は、刊行当時より古い時代の詞章を収める場合が多いから、右に翻印した問答は、江戸初期の式三番の中で演じられた形態（の一種）と見て大過あるまい。

さて、右の翻印と『狂言集成』等に紹介されている文句（江戸末期以後、現在まで踏襲されている形）とを比較してみると、小さな相違点は多いものの、「初日」の分は現行の初日の形にほぼ同じく「二日」の分は現在の「田歌」の形に該当し、「三日」の分は現在の三日目の形（子宝）にあたっている。四日目は初日にもどるという点も、現在と同じである。最大の相違は、現在二日目に演じられる形（烏帽子の祝儀）が寛永の版本には無く、現在は何日目という限定なしに演じ得ることになっている「田歌」が寛永版本で二日目にあてられていることである。これはどう考えるべきであろうか。

寛永版本の形が江戸初期の狂言方諸流に共通で演じられていた形であるとすれば、後に「烏帽子の祝儀」の形が二日目の地位を獲得し、かって二日目だった「田歌」が順位不定の位置に移されたと考えざるを得ない。しかし、そうしたことが生じ得たとすれば、江戸初期の式三番の三番叟問答の演出は、今日ほど固定的ではなかったことが想像され、ある流儀（またはある場合）には「烏帽子の祝儀」を二日目に演じ、別の流儀（または別の場合）は「田歌」を二日目に演じていたことも、十分考えられよう。幾つかあった形のうち、寛永版本は二日目「田歌」の形を採用し、後年には二日目「烏帽子の祝儀」の形に固定したものと解するわけである。そのどちらであるか、寛永版本『式三番』だけを資料として結論を出すことは無理であろう。また、参照するに足る別の資料が存在してもいる。それの紹介、及びこれ以上の考察は次回に譲るが、寛永版本『式三番』と現行の形を比較しただけでも、幕末以降の狂言方三流間の異同以上に、江戸初期と幕末とでは三番叟問答の文句に異同が激しいことが知られよう。最も相違の少ない初日の分でも、末尾のとめ方に違いがあるし、「田歌」「子宝」の導入部分の異同が特に著しい。式三番の一部ではあったが、三番叟問答は江戸期まではかなり流動性を保持していたようである。

（44・2・7）